

地域のかお シリーズ114

祖母と鯉節

宮崎市立広瀬西小学校
校長 麦田 哲之

おばあちゃん子だった私は、祖母が大好きでした。祖母といっしょに行った「鯉節削り」は、今でもよく覚えています。年季の入った木製の台に刃が取り付けられた鯉節削り器に、乾いた鯉節の塊を当てて、ゴリゴリと手前に引くと、薄く削られた花かつおが装着された箱の中に舞います。鯉節の塊の重さ、力の入れ具合によって異なる花かつおの薄さと美しさ、手に伝わる振動と音。そして削りたての鯉節から漂う芳香で複雑な香りは、何とも言えません。私は、祖母が差し出した削りたての鯉節をほおぼると、口の中に薄いかつおの香りと「だし」の風味を感じながら、あの堅かった鯉の変化まで飲み込みました。祖母の笑顔と鯉節の香りがいっしょに思い出されます。

さて私の子どもは、「鯉節を削る」ことを知りません。生まれたとき、すでに鯉節は削られてビニールの小袋に入っていました。鯉節は松の節のように堅くて色が赤いため、「一節、二節」と「節」で数えられ、製法の「いぶし」と合わさって「鯉節」と呼ばれるようになったと言われています。ビニール袋に入っている薄いものは、ちっとも堅くないので、私の子どもはなぜ「鯉節」と呼ばれているのか知りませんし、知る余地もありません。小袋に入っている鯉節は、削る時間を省く便利さを得ましたが、同時に鯉節を削るという貴重な「体験」を失ってしまったようです。



慶應義塾大学教授の中室牧子先生は、教育経済学の専門家として、子どもの学力や非認知能力の形成に「体験」が果たす役割は大きいと言っています。非認知能力とは、協調性、自制心、自己肯定感などで、子どもの将来の学業成績だけでなく、社会に出てからの職業生活や幸福度にも大きく影響するとされています。子どもの時に、自然の中で遊ぶ体験をする、旅行をする、博物館や図書館などに行く、友達と多様な遊びをするなど、子どもの成長に「体験」はとても大事なのだそうですよ。休日に家族で博物館や図書館へ行く、家族で家庭菜園を楽しむ、公園で遊ぶなど、お子様の成長のための「体験」を楽しんでみるのはいかがでしょうか。

ところで、夏目漱石の名作「三四郎」には、登場人物で画家の原口さんのこととして、次の一文があります。

「原口さんは洋行する時にはたいへんな気込みで、わざわざ鯉節を買い込んで、これでパリーの下宿に籠城するなんて大いばりだったが、・・・(省略)」(夏目漱石「三四郎」より) 素直にこの名作を読んだ小中学生は、原口さんが鯉節入りのビニール小袋を大量に買い込んでパリに行ったと想像するのでしょうか。